

飯館村を訪問させていただいて

NS

1. はじめに

今回飯館村を訪問することに至った契機は、大学の専門演習の一環として高雄教授の提案があったからだ。今回は希望制という形をとり、その結果私を含む3人の学生が飯館村の訪問をした。希望制ということもあり、当初私は飯館村に赴く予定ではなかった。というのは、中学時代に他の被災地に訪問した経験があるのだが、そこは寂れ人々の活気も失せていたのだ。そのイメージが定着し、被災地＝廃れているというように自分の中で変換させてしまうと、自分が飯館村に赴くメリットはないのではないかと思っていた。ただ私自身メディアを介した情報より、現地に行き自らの五感で情報を掴み取ることを信条としている。従って最終的には飯館村を訪れることに決意した。本レポートでは実際に足を運ぶ以前の思いから、今回の体験を通じて自分の胸中がどのように変化したのか、時系列に沿って辿りたい。

2. 訪問して



飯館村に訪問するまで被災地＝荒廃した場所というイメージを抱いていた。実際にメディアを介しての情報では未だ復興が進んでいないということしかわからなかった。従って足を踏み入れるまで、不安な面持ちもあった。

しかしいざ訪れると、ここは本当に被災した地域なのかと目を疑った。それだけ自然の雄大さに圧倒された。東京や横浜のように人為的に作られた町とは異なる美しさがそこには存在した。鳥の囀りや野生の猿、イノシシを発見したのは何時以来だろうか。自然や生命に富んだ村である。



左の写真は水田を写している。福島原子力発電事故が発生するまで、この辺り一帯は米所だったそう。事故後は飯館村一帯の農産物の販売が停止されている。しかし稲作を中断しないのは、再び生産できるようになった時に、土地

がやせて生産できなくなるのを防止するためである。

驚いたことにこの地で栽培されたお米は、放射能は検出されず、私たちが普段どれだけ信用にならない情報に依存しているのか分かった時に、飯館村への偏見の目を反省せざるを得なかった。



ただ進むにつれ、語り部のお話を伺うにつれ、そのような優美な自然を私たちが破壊してしまったという事実気が付いた。

その決定打となったのが、左の写真である。これは放射性物質を処理した袋が積み重ねられている様子だ。この写真だけだと分かり辛いですが、このような光景が他の所にも点在してい

る。美しい山々と連なる無数の黒い袋は違和感しか与えない。前述の水田では表土の放射性物質を剥ぎ取り、そして安全な稲を育てることが可能となった。私たちが生きる上で欠かせない食料の生産地を自らの手で汚したのだと考えると、私たちが利便性を求めたことの代償は遥かに大きなものだったことが分かる。



自らの手で首を絞めているということはこの写真においても言えることだ。

左の写真は牛小屋として使用されていたが、牛は原発事故後に様々な土地に移送された。飯館村ではこの土地のみで育てたブランド牛が有名で、育てる環境にこだわっていたのだが、とても残念である。

現代の牛肉は殆どが最終の産地のみを記載され、その過程で放牧されていた地名は書かれない。また敢えて病気の牛を育て霜降りとして高値で売買する。

人間の望み通りに動植物を支配していたのが、従来の私たちの生き方である。そのような極めて利己的な行為は当然許されるものではない。

飯館村を訪問した後にふくしま再生の会の方々にお話を伺う機会があった。その中で感じたのは、メディアや行政の対応に戸惑っていたのは私たち以上に飯館村や他被災地で暮らしていた人々だったということだ。現地では被災の1ヶ月後に小学校の再開の話が持ち上がっていたが、結局その話の直後行政によって避難勧告が言い渡されたそうだ。飯館村の復興を待ちわびる人々の気持ちを尊重せず、明確化されていない放射能の危険値によって安全さを図ろうとする行政。そしてすべての情報を商業化するメディア。そして実際に足を運ぶこともせず、メディアの情報を鵜呑み、風評被害を生み出す私たち。行政やメディア批判はよく見かけるものの、実際は私たちも被災地が復興しづらい原因を生み出していることに気が付いた。そのような復興しづらい状況下においても、ふくしま再生の会の方々はあることから復興の手立てを始めている。実際にこれから太陽光発電システムの導入や、地域に根差した学校の再開が検討されている。このような取り組みが実施される中で、私たちは進んでその活動を協働していくことが復興するために欠かせないのではないかと。次の世代を担う私たちが被災地に直接働きかけることなしでは、恐らく日本は衰退してしまうのだろう。

3. 終わりに

実際に飯館村を訪問するまで、被災地に対してマイナスイメージを抱いていた。しかし飯館村は都心以上に自然や動物、人々が生き生きとしていた。そのような恵まれた環境を破壊したのは紛れもなく、利便性を追求した私たちである。そのように考えると、私たちは飯館村と分断された存在ではなく、他人事として被災地復興を見守ってはならないだろう。特に次世代を担う者であるからこそ、課せられた社会的使命は大きい。主体性を持つとともに、被災者への支援といった従来の力関係を取り払い、被災地で生活する人々に寄り添う形での復興活動へ参加する必要がある。私自身もこれを契機に授業の一環として参加するだけでなく、自らの意志で飯館村を訪問したい。